

テモテへの手紙 第二 4 章 9~22 節 共に忠実であり続ける

本日、私たちはテモテへの手紙第二の終わりに到達しました。この書簡は挑戦的ですが、同時に励まされます。死が迫り、そのことを自覚していたパウロが、イエス・キリストへの希望を通じて、テモテに召命への忠実さを堅持するよう促しているからです。第 2 テモテ 4 章 9 節から 22 節の最後の励ましの言葉は、パウロの奉仕において非常に重要な人間関係に焦点を当てており、テモテだけでなく私たちにとっても模範となるものです。

今日、これらの名前とパウロのコメントのリストを見ていく中で、パウロにとって、生涯にわたって神の召命に忠実であるための重要な要素の一つは、互いに忠実であり続けることであることがわかります。キリストの弟子としてのこの人生は、キリストの体である教会の一員として、本当に家族である共同体の中で生きるように定められています。第 2 テモテ 4 章 9 節から 22 節を読んでみましょう。

テモテへの手紙 第二 4 章 9~22 節 あなたは、何とかして早く私のところに来てください。 10 デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました。また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマティアに行きました。 11 ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。 12 私はティキコをエペソに遣わしました。 13 あなたが来るとき、トロアスでカルポのところにおいてきた外套を持って来てください。また書物、特に羊皮紙の物を持って来てください。 14 銅細工人のアレクサンドロが私をひどく苦しめました。その行いに応じて、主が彼に報いられます。 15 あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです。 16 私の最初の弁明の際、だれも私を支持してくれず、みな私を見捨ててしまいました。どうか、その責任を彼らが負わせられることがありませんように。 17 しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。こうして私は獅子の口から救い出されたのです。 18 主は私を、どんな悪しきわざからも救い出し、無事、天にある御国に入れてくださいます。主に栄光が世々限りなくありますように。アーメン。 19 ブリスカとアキラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。 20 エラストはコリントにとどまり、病気のトロフィモはミレトスに残して来ました。 21 何とかして冬になる前に来てください。ユブロ、ブデス、リノス、クラウディア、そしてすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。 22 主があなたの霊とともにいてくださいますように。恵みがあなたがたとともにありますように。

第 2 テモテの最後の節において、書簡の受取人であるテモテに加え、17 人の異なる人たちが言及されています。パウロにとり、ミニストリーにおいての人との協力関係は重要でした。この箇所は、パウロがテモテにいち早くローマに来てくれるよう最善を尽くすよう促すところから始まります。彼はテモテと共にいることを望んでいました。そして、テモテだけではなく、パウロはマルコも共に来ることを願っていました。パウロはこう言っています、**マルコを伴って、一緒に来てください。**

そして、彼はルカだけは現在ローマで一緒にいることを言及しています。パウロが獄中にいることを覚えていますか。おそらく人々はパウロと自由に面会でき、パウロは彼らに食料や他の物資の供給を頼っていたのでしょう。実際、パウロがテモテにローマに持参するよう頼んだものの一つは、カルポという友人に預けた外套です。獄中は時として非常に寒かったため、パウロはこの外套を暖を取るために必要としていたのです。さらに、これらの人たちは彼の物理的な必要を満たすだけでなく、親交と言う感情的な必要にも応えていたのです。

その親交関係の欲求は、パウロを見捨てたデマスに対して彼がどれほど傷ついているかを見ればわかります。パウロと公に親しい関係にあることで、他の人たちに危険が及ぶ可能性があったため、彼は自分自身と自分の命を守るためにパウロの元を去ったのでしょう。何が起こったにせよ、パウロは、この世での生活への愛が、デマスがパウロを見捨てた原因だと言いました。それはパウロを深く傷つけました。パウロは、敵であったアレクサンダーに対してのように、デマスの不幸を願ったり、神による裁きについて言及したりすることはありませんでした。多くの場合、他の信者たちとの関係を損なうのは、この世への愛です。私たちは教会に行くことを怠り始めます。キリストの兄弟姉妹たちが手を差し伸べてくれるのに、その話をしたくないので、彼らを見捨てます。

キリスト教徒を避け、何よりもキリストに従う必要性を私たちに問い詰めようとはしない救われていない友人たちと過ごす方が楽になります。道筋は常にこのようであるとは限りません。ある種の罪が、イエス様を知るべき喜びよりも私たちにとってより楽しいものとなり、その罪が他のクリスチャンから私たちを遠ざけることもあります。あるいはパウロや他の者たちの状況のように、何らかの形で迫害のリスクが大きすぎる時、デマスのように離れていく方が簡単であり、迫害されているクリスチャンの一人として見られずにすみます。

デマス以外にも、パウロはテモテに、銅細工師のアレクサンダーという悪人について警告しています。この人物については何も知らされていません。使徒の働きに登場するアレクサンダーと同一人物であるとの推測もありますが、その関連性は定かではありません。彼が誰であれ、福音とパウロの敵であり、何らかの形でパウロに害を及ぼそうとした人物であることは明白です。テモテがパウロに会うために旅をする途中、おそらくアレクサンダーと同じ場所に行くことになるので、パウロは彼にアレクサンダー、**彼を警戒しなさい**と確実に伝えようとしています。

アレクサンダーは、パウロが本当に敵だと考える唯一の人物です。パウロは、16節で次のように述べていることから、すでにローマで最初の裁判を経験していた可能性が高いと思われます。**16 私の最初の弁明の際、だれも私を支持してくれず、みな私を見捨ててしまいました。**

私たちは、パウロが裁判で自身の無実を証明するために証人として頼りにしていた人物が誰であったのかはわかりません。おそらくデマスだったかもしれませんが、彼らは彼を見捨て去ってしまいました。しかし、そのような人々についてでさえ彼が何と言っているか注目してください。**どうか、その責任を彼らが負わせられることがありませんように。**

彼らは不信者や敵ではありません。彼らはキリストの兄弟であり、信仰が弱く、パウロを擁護する力がなかった信者たちでした。パウロは、彼らの弱さにもかかわらず、彼らに対してキリストの愛を示しています。彼が言及する他の者たちは、おそらく様々な地域への宣教のために派遣されていたようです。**クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマティアに、エラストはコリントにとどまりました。**

パウロは、トロフィモが病気だったため、彼をミレトスに残して回復を待つしかなかったとさ述べています。そして、この書の最後で、パウロは彼にとって特別な存在だった人たち、プリスカとアキラ、そしてオネシポロと家族について言及しています。プリスカとアキラは、コリントの街に住むテント職人でした。彼らは使徒の働き 18 章 2 節で初めて登場します。**使徒の働き 18 章 2~3 節** **そこで、ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。パウロは二人のところに行き、3 自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。**したがって、パウロがコリントの街で教会を開拓した際、彼はこのクリスチャンの夫婦と共にテント作りを仕事として行い、生活費を賄っていました。使徒行伝 18 章 18 節では、彼らがパウロの宣教旅行の残りの行程の一部を共に旅したことが記されています。**使徒の働き 18 章 18 節** **パウロは、なおしばらく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて船で出発した。プリスキラとアキラも同行した。**彼らはエペソへ一緒に赴きました。エペソでは神を畏れ、仕えて説教はしていますが、イエス様について知らないアポロと言う名の男がいました。そこで、この夫婦が彼にイエス様に従うことで神への信仰を成長させるために、時間を割いて助ける姿を見ます。**使徒の働き 18 章 26 節** **彼は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いたプリスキラとアキラは、彼をわぎに呼んで、神の道をもっと正確に説明した。**パウロは現在彼らと共にいますが、事あるごとに手紙で彼らに愛を伝えるために挨拶を送りました。パウロにとりとても大切な支えであった人、オネシポロとその家族は、彼には特別に愛しい存在でした。第 2 テモテ 1 章 16 節から 18 節では、次のように記されています。**テモテへの手紙 第二 1 章 16~18 節** **オネシポロの家族を主があわれんでくださるよう。彼はたびたび私を元気づけ、私が鎖につながれていることを恥と思わず、17 ローマに着いたとき、熱心に私を捜して見つけ出してくれました。18 かの日には主が、ご自分のあわれみをオネシポロに示してくださいますように。**エペソで彼がどれほど多くの奉仕をしてくれたかは、あなた自身が一番よく知っています。最後に、彼は裁判官の前で一人残されましたが、どうやらパウロはローマの迫害を受けていた教会に友人たちがいたようで、21 節でその人々からの挨拶を添えて結んでいます。**ユブロ、プデス、リノス、クラウディア、そしてすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。**このリストの人々について話した

と思った理由は、これらの人間関係はどこから来たのを知ってほしいからです。それらはその地域教会から、キリストの体である教会における信者との関係から来ています。パウロが投獄と迫害に耐えながら前進し続ける原動力は何でしょうか？それは地域教会であり、救いによって彼と結びついてあるキリストにある兄弟姉妹たちです。

これらの名前は、ヘブライ語の名前とギリシャ語またはローマ語の名前です。彼らはローマ世界のさまざまな都市や地域から来たユダヤ人と異邦人でしたが、キリストにおいて一つでした。彼らは、パウロが神に仕える中で殉教に至るまで耐え続ける力を与えました。なぜ地域教会に参加するのでしょうか？なぜなら、私たちは互いが必要だからです！イエス・キリストに生涯忠実であるために、私たちは信仰の生活を共に生きる必要があります。クリスチャン生活は、一人で生きるためのものではありません。兄弟姉妹と共に一致して生きるためのものであり、私たちは皆、現実の生活と現実の罪を抱えており、それが関係性を困難にします。この箇所にマルコが含まれていることは、この点を強調する重要な意味があります。使徒の働き 15 章では、マルコが期待を裏切ったことについて記されています。**使徒の働き 15 章 36~39 節 それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」 37 バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネと一緒に連れて行くつもりであった。38 しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうがよいと考えた。39 こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き**マルコは期待を著しく裏切ったため、パウロは彼と再び宣教の旅に出ることを望みませんでした。マルコの存在そのものが、パウロと忠実な友人バルナバの間にも亀裂を生じさせました。しかし、これが教会の美しさです。失敗は必ず起こります。決して避けられません。しかし、共に人生を歩み、共に奉仕し続けることを求めるための修復と愛があります。したがって、パウロが**マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。**と言ったことは、マルコにとって大きな意味を持ち、教会内の他のメンバーにも強いメッセージを送ったに違いありません。これが、教会が提供する愛、一致、交わり、そして修復の力であり、イエス・キリストに従う信仰の旅路において私たちを支えてくれるものです。しかし、この人々のリストの真ん中で、彼はテモテに対してもう一つ興味深いコメントをしています。再び 13 節を見てください、**あなたが来るとき、トロアスでカルポのところに置いてきた外套を持って来てください。また書物、特に羊皮紙の物を持って来てください。**

多くの学者は、これらの書物はおそらく聖書、旧約聖書であったと信じています。羊皮紙は入手困難な筆記材料でした。なぜパウロはこれらを望んだのでしょうか？彼はおそらく聖書の大部分を暗記していました。それでもなお、神の御言葉を読み、学び、自らを養い続けるために、投獄されていてもそれが必要だと考えたのです。

イエスが直接現れ、弟子として使徒に召した人物で、ファリサイ派として聖書を熟知していた彼が、神の御言葉を持つことが必要だと考えたのなら、私たちにとってなおさらではないでしょうか。そして羊皮紙は何のためでしょうか。羊皮紙があればパウロは筆記することができます。パウロの奉仕は、命が続く限り終わりません。このリストの一人ひとりが、励ましを必要とするそれぞれの教会、パウロが愛を伝える事ができるもう一人の個人を象徴していました。メールもテキストもなく、ましてや紙さえ容易に入手できない時代にあって、彼は獄中においても宣教を続けるために羊皮紙を必要としました。パウロが獄中で聖書と紙を求めたのは偶然ではないと私は信じています。使徒として、また複数の教会における長老としての彼の奉仕は、御言葉による奉仕でした。聖書に保存されている彼の著作はすべて、実際には神の啓示、すなわち神ご自身の御言葉でした。しかし、彼の手紙でさえも、すべて旧約聖書、すなわちイエス・キリストにおいて今や成就しつつある旧契約に対する彼の理解と適用に基づいて書かれています。したがって、彼が書いたすべての手紙は、それを読む者たちへの神の御言葉に対する彼の知識と適用に満ち満ちていました。そしてこの御言葉の奉仕は、彼が書き送った人々なしでは意味をなしません。彼が愛し、また彼を愛した人々。彼が手紙を書いたたびに思い出し、近況を尋ねた人たちです。そして、彼が手紙を書いていたのはまさにその人たちでした。彼の奉仕は、使徒として召された者として、これらの民と教会を牧会し、迫害に直面しながらもキリストを知り、彼に忠実であり続けるよう導くこと、すなわち、口頭であれ書面であれ、福音を宣べ伝えることでした。神が地上でその力を与え、時を許す限り、この他者への奉仕、そして他者と共に歩む奉

仕は続いたのです。神様の力によって奉仕を行うというこの重点こそが、パウロを励まし続けたのです。これは、最後の挨拶を除けば、彼の最後の言葉と見られる部分にも表れています。2 テモテ 4:17-18 には、**17 しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。こうして私は獅子の口から救い出されたのです。 18 主は私を、どんな悪しきわざからも救い出し、無事、天にある御国に入れてくださいます。主に栄光が世々限りなくありますように。アーメン。**

パウロはローマのコロシウムでライオンの餌食になる寸前だったのでしょうか？おそらくそうかもしれませんが、より可能性が高いのは、これが彼が比喻を用いて「神は彼が経験したすべての悪から救い出された」と表現する方法だったことです。救いとは、痛みや苦しみから彼を免れることなく、それらを通り抜けることでさらに奉仕の道を歩ませることを意味していました。パウロがこの文章を書いている際に、自分が殉教者の死にどれほど近づいていたのかを本当に知っていたかどうかは、永遠を生きる時にわかるでしょう。しかし、ある時点で彼の命はもはや守られず、人間の視点からすれば、比喻的なライオンが彼を襲うことになったのでしょうか。しかし、それでも神の恵みは、サタンの攻撃や人間が彼に対して行うあらゆる悪行よりも優れていたのです。なぜなら、パウロにとって、そして私たちにとって、イエス・キリストを知っているなら、死に滅ぼす力ではないからです。死は、完全なるものへの移行であり、私たちの真の我が家への帰還であり、神の天の王国への移行です。神に忠実に生き、神の民から人生の旅の力を得て、同じ旅路を歩む他者に神の愛を伝える男や女は、その旅の終わりが天の王国で迎えられると約束されています。神の永遠の栄光が、その住民一人一人に完全に現れる王国、そして罪が私たちの聖なる神の栄光に影を落とさない王国です。このビジョン、この希望、この目標は、私たちにパウロと共に**主に栄光が世々限りなくありますように、アーメン**と叫ばせるべきものです。では、なぜ神は私たちがクリスチャンとなりイエス・キリストに従う時、すぐにこの栄光を体験できるように私たちに天に召さないのでしょうか？パウロが指摘するように、完全に宣べ伝えられるべき御言葉のメッセージがあり、福音の真理を聞く必要がある人々がいるからです。もしかしたら、あなたは今日その一人かもしれません。私たちがキリストを知っているにもかかわらず、教会として集まり、天の喜びをまだ体験していない主な理由の一つは、あなたに**神はあなたの創造主です**、と宣べ伝えるためです。神はあなたを創造されましたが、**ローマ人への手紙 3 章 23 節 すべて人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、ローマ人への手紙 6 章 23 節 罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。**

主は私たちに永遠の命と罪の赦しを授けることができます。なぜなら、神の御子イエス・キリストは、私たちの罪の代償を支払い、私たちの代わりに死を打ち破るために、十字架で死に、再びよみがえられたからです。あなたは今日、あなたの罪を悔い改め、イエス様をあなたの主であり救い主として受け入れることで、イエスを信じますか？私たちは、イエス・キリストを信じる者たちの集まりとして、キリストの体として契約を結んだ教会として、イエス様に従うことが何を意味するかを示すためにここにいます。そして、神の御言葉の奉仕を通じて、神だけが与えてくださる力によって、私たち一人一人がこの地上での生涯を通じて神に忠実であり続けるよう励まし合います！そうすれば、歴史上のすべてのキリストの忠実な信徒たち、パウロやこの手紙の最後に彼らが称賛する人々を含む、全員で声を合わせて言うことができるでしょう。

主に栄光が世々限りなくありますように。アーメン 祈りましょう。

2Timothy 4:9-22 Remain Faithful Together

Today, we have reached the end of 2Timothy. This book is challenging, but at the same time encouraging as Paul, who is near his death and seemed to know it, challenges Timothy to remain faithful to his call through the hope we have in Jesus Christ. His final encouragement that we will see in these last verses of 2Timothy 4:9-22 revolve around the relationships with people that are so important to Paul's ministry and will be by example to Timothy and to us as well. While we look through this list of names and comments about them today, we see that for Paul one vital part of remaining faithful to God's call throughout our lives is that we are to remain faithful together. **This life as a follower of Christ is meant to be lived in community**, in family really, with others in the Body of Christ. Let's read these verses 2Timothy 4:9-22. ⁹Do your best to come to me soon. For Demas, in love with this present world, has deserted me and gone to Thessalonica. Crescens has gone to Galatia,^[a] Titus to Dalmatia. ¹¹Luke alone is with me. Get Mark and bring him with you, for he is very useful to me for ministry. ¹²Tychicus I have sent to Ephesus. ¹³When you come, bring the cloak that I left with Carpus at Troas, also the books, and above all the parchments. ¹⁴Alexander the coppersmith did me great harm; the Lord will repay him according to his deeds. ¹⁵Beware of him yourself, for he strongly opposed our message. ¹⁶At my first defense no one came to stand by me, but all deserted me. May it not be charged against them! ¹⁷But the Lord stood by me and strengthened me, so that through me the message might be fully proclaimed and all the Gentiles might hear it. So I was rescued from the lion's mouth. ¹⁸The Lord will rescue me from every evil deed and bring me safely into his heavenly kingdom. To him be the glory forever and ever. Amen. ¹⁹Greet Prisca and Aquila, and the household of Onesiphorus. ²⁰Erastus remained at Corinth, and I left Trophimus, who was ill, at Miletus. ²¹Do your best to come before winter. Eubulus sends greetings to you, as do Pudens and Linus and Claudia and all the brothers.

In these final verses of 2Timothy, there are 17 different people mentioned in addition to Timothy being the recipient of the letter. People and partnership in ministry were important to Paul. This passage begins by Paul telling Timothy to do his best to come to him in Rome. He wanted to be with Timothy. And it wasn't just Timothy... he wanted him to come with Mark. He says, "bring him with you..." And he is sure to mention that Luke is currently with him in Rome. Remember Paul is in prison. It was quite likely that people could visit him freely, and he probably relied on them for food and other provision. In fact, one of the things he tells Timothy to bring him at Rome is a cloak he left with a friend named Carpus. The prison was likely quite cold at times, and he needed this cloak he had left for warmth. So these people were attending to his physical needs, as well as an emotional need for companionship. You can see that desire for companionship in how hurt he is by Demas who has deserted him. It is likely that being publicly identified with Paul may have put others at risk, and to protect himself and his life, he left Paul. Whatever happened Paul said his love for life in this world had led to him deserting Paul. That hurt Paul greatly. He didn't wish him ill or even mention God's judgement on him like he did for Alexander who was an enemy of Paul. Many times, it is a love for this world that can harm our relationships with other believers. We begin to miss church. When brothers and sisters in Christ reach out, we ignore them because we do not want to have that conversation. It becomes easier to just avoid Christians and hang out with our unsaved friends who will not try to challenge us on our need to follow Christ above all. The path may not always look like this. Perhaps certain sins become more enjoyable to us than the joy we should find in knowing Jesus, and that sin pushes us away from other Christians. Or like the situation for Paul and others, the risk of persecution in some way is too great, so like Demas it is easier to walk away and not be looked at as one of the Christians who is being persecuted.

Other than Demas, Paul warns Timothy of one negative person, Alexander the coppersmith. We don't know anything about him. There is speculation he is the same Alexander mentioned in Acts, but the connection is definitely not clear. Whoever he was, it is clear, he is an enemy of the gospel and an enemy of Paul who has sought to harm him in some way. Part of Timothy's trip that he will make to see Paul would perhaps put him in the same location as Alexander so Paul wants to make sure he knows to **beware** of him. Alexander is the only one that Paul really deems to be an enemy. It seems likely that Paul had already been through a first trial in Rome, because he says in verse 16, **¹⁶At my first defense no one came to stand by me, but all deserted me.** We don't know who Paul had counted on to stand with him as witnesses for his innocence at his trial, perhaps Demas, but they had left him. But even with those people, notice what he says, **May it not be charged against them!** These are not unbelievers and enemies. They were believers, brothers in Christ, who were just weak in their faith to stand up for Paul, and Paul shows Christian love for them even in their weakness. Others he mentions, seem to have been sent out for ministry to various areas **Crescens** went to **Galatia**, **Titus** to **Dalmatia**, and **Erastus** is at **Corinth**. Paul even cares to mention that Trophimus had been sick and so apparently Paul had been forced to leave him in Miletus where he could recover. Then at the end of the book, we see him mention people who were very special to him, Prisca and Aquila and the household of Onesiphorus. Prisca and Aquila were tentmakers who lived in the city or Corinth. We are first introduced to them in **Acts 18:2. And he [Paul] found a Jew named Aquila, a native of Pontus, recently come from Italy with his wife Priscilla, because Claudius had commanded all the Jews to leave Rome. And he went to see them, 3 and because he was of the same trade he stayed with them and worked, for they were tentmakers by trade.** So, while Paul was planting the church in the town of Corinth, he worked as a tentmaker with this Christian husband and wife to pay his expenses. Later in **verse 18 of Acts 18**, we see that they went with him on at least part of the rest of his missionary journey. **After this, Paul stayed many days longer and then took leave of the brothers and set sail for Syria, and with him Priscilla and Aquila.** They go to Ephesus together and in Ephesus, a man named Apollos who does fear and serve God is preaching, but he doesn't know about Jesus. So we see this husband and wife take time help him grow in his faith in God by following Jesus. **Acts 18:26 says, 26 ... they took him aside and explained to him the way of God more accurately.** Paul is not with them right now, but he takes every opportunity he can to basically send them his love in greeting them by letter. The household or family of Onesiphorus was especially dear to him because this man Onesiphorus meant so much to him. Earlier in **2Timothy 1:16-18 we read, 16 May the Lord grant mercy to the household of Onesiphorus, for he often refreshed me and was not ashamed of my chains, 17 but when he arrived in Rome he searched for me earnestly and found me— 18 may the Lord grant him to find mercy from the Lord on that day!—and you well know all the service he rendered at Ephesus.** Finally, although, he was left alone in front of the judge, apparently Paul had friends in the persecuted church at Rome as he closes with greetings from those people in verse 21, **Eubulus sends greetings to you, as do Pudens and Linus and Claudia and all the brothers.** I wanted to go through this list of people to say this...where do all the relationships come from? They come from local churches, and his relationships with others in the Body of Christ. What keeps Paul going as he endures imprisonment and persecution? It is the church, and the brothers and sisters in Christ who he is related to by the fact of their salvation. These names listed are both Hebrew names and Greek or Roman names. They were Jews and Gentiles from many different cities and areas of the Roman world, but they were one in Christ. They gave Paul the strength to go on as he served God even to the point of martyrdom. Why join a local church? Because we need each other! In order to remain faithful to Jesus Christ throughout our lives, we need to live the life of faith together. The Christian life is not meant to be lived alone. It is meant to be lived together in unity with brothers and sisters, where we all have real lives and real sin

which makes those relationships hard. There is a significance to Mark being included in this passage that really drives this point home. In Acts 15, we read about a failure on the part of Mark. Acts 15:36-39 says, 36 And after some days Paul said to Barnabas, "Let us return and visit the brothers in every city where we proclaimed the word of the Lord, and see how they are." 37 Now Barnabas wanted to take with them John called Mark. 38 But Paul thought best not to take with them one who had withdrawn from them in Pamphylia and had not gone with them to the work. 39 And there arose a sharp disagreement, so that they separated from each other. Barnabas took Mark with him and sailed away to Cyprus... Mark had failed, to the extent that Paul did not want to do another missionary journey with him. His presence even caused a split between him and his faithful friend Barnabus. But this is the beauty of the church. There is failure. It is inevitable. But there is restoration and love that seeks to continue to do life together and minister together. So the fact that Paul would say, **Get Mark and bring him with you, for he is very useful to me for ministry**, had to mean a lot to Mark and send a strong message to others in the church. This is the love, the unity, the fellowship and the restoration that the church provides that can sustain us in our journey of faith, following Jesus Christ.

But in the middle of this list of people, he makes another interesting comment to Timothy. Look at verse 13 again, **13 When you come, bring the cloak that I left with Carpus at Troas, also the books, and above all the parchments.** Most scholars believe that the books are likely the Scripture, the Old Testament. And the parchments were writing materials which were not easy to come by. Why did Paul want these? He probably had large amounts of scripture memorized. But still having the Word of God to read, to study, to continue to feed himself, he thought that was necessary even in prison. If the man who Jesus appeared to personally and called as his follower and apostle, who by virtue of being a pharisee knew the scripture backwards and forwards, thought having the Word of God was necessary, how much more so for us? And what about the parchments? These meant he could write. Ministry for Paul did not end until life itself ended. Everyone of these people represented another church who could use encouragement, another individual who Paul could express his love for. And in a day of no email or text or even readily available paper, he needed his parchment for ministry to continue even in prison. I don't believe it is coincidental that Paul asks for basically a Bible and paper in prison. His ministry as an apostle and an Elder in several different churches was a ministry of the Word. Everything he wrote that is preserved in the Bible was actually God's revelation, God's Scripture itself, but even his letters are all written based on his understanding and application of the Old Testament or Old Covenant now being fulfilled in Jesus Christ. So, every letter he wrote was saturated by his knowledge and application of God's Word to those who read it. This ministry of the Word was meaningless without the people to whom he was writing. The people who he loved, and who loved him in return. The people who he remembered and asked about whenever we see him writing these letters. And those people were the ones he was writing to. His ministry was preaching the gospel, whether through spoken or written word, as an apostle called to shepherd these people and these churches to know Christ and remain faithful to him in the face of persecution. That ministry to and with others would continue as long as God gave him strength and time on earth to do it.

It is really this focus on doing ministry in God's strength that kept Paul going. We see this in what seems to be his final words, except for the greetings at the very end. 2Timothy 4:17-18 says, **17 But the Lord stood by me and strengthened me, so that through me the message might be fully proclaimed and all the Gentiles might hear it. So I was rescued from the lion's mouth. 18 The Lord will rescue me from every evil deed and bring me safely into his heavenly kingdom. To him be the glory forever and ever. Amen.** Was Paul almost sacrificed to lions in

the Roman coliseum? Possibly, but more likely this is his way of using metaphor to say that God had rescued him from every evil thing that he had gone through. Rescue was not sparing him from pain and suffering, but bringing him through each of them to further ministry. We will only know in eternity whether Paul knew just how close to a martyr's death he was while writing this. But at some point, his life was no longer spared and from a human standpoint, the metaphorical lion would get him. But even then God's provision would prove greater than the attacks of Satan and every evil deed that men could bring against him. Because for Paul and for us if we know Jesus Christ, death is not destruction. Death is a move into perfection, into our true home, into God's heavenly kingdom. The man or woman who lives a life faithful to God, drawing strength for life's journey from the people of God and ministering God's love to others on the same journey, is promised an end to that journey in a heavenly kingdom. A kingdom where God's eternal glory is perfectly displayed in every one of its residents, and where sin does not cast shadows over the glory of our holy God. This vision, this hope, this goal, should cause us to say with Paul, **To him be the glory forever and ever! Amen!** And why does God not just remove us when we become a Christian and follow Jesus Christ so that we can immediately experience this glory? Because as Paul points out, there is a **message** that needs to be fully proclaimed and people who need to hear the truth of the gospel. Maybe you are one of those people today. One primary purpose why all of us who know Christ are still here gathering as the church and not experiencing the joys of heaven is to proclaim to you that God is your creator. He created you, but **all of us have sinned and fall short of the glory of God (Romans 3:23)** The **wages of our sin is death, but the free gift of God is eternal life through Jesus Christ our Lord (Romans 6:23)**. He can offer us that eternal life and forgiveness for our sin, because Jesus Christ, God the Son, died on a cross and rose again to pay the price for our sin and conquer death on our behalf. Will you believe in Jesus today by repenting of your sin, and accepting him as your Lord and Savior? We as a church, as a group of believers in Jesus Christ covenanted together as the Body of Christ, are here to show you what it means to follow Jesus. And through the ministry of the Word of God, by the strength that God alone provides, encourage each of us to remain faithful to God throughout our time on this earth! So that with one voice, we can say with all the faithful followers of Christ throughout history including Paul and those he commends at the end of this letter, **To [God] be the glory forever and ever! Amen!** Let's pray.